



今月のことば

Words of the Month

明細書に関する雑感

—村上春樹を目指しませんか—

日本弁理士会副会長

永岡 重幸

1. はじめに

私が弁理士登録したのは1996年。今年は弁理士になって25年目の節目。25年間をざっと振り返って、明細書の書き方に関する私の考えを思うままに書いてみました。

2. 「私の仕事は文章を書くことです」

これは、25年前に、イギリス人から「仕事は何してるんですか？」と聞かれた時の私の答えです。25年前は、特許事務所に勤務してました。弁理士ですと答えてもよかったのですが、writingと答えました。特許事務所での主な仕事は、明細書を書くことですが、「明細書」とイギリス人に言っても分からないと思い、文章を書くことだと答えたこと記憶しています。明細書は発明の内容を記載する文章です。明細書を書くという仕事は、文章を書く仕事だと言ってよいと思います。

特許事務所に入って文章を毎日書くようになって、色々感ずることがありました。文章を書く上で一番怖いと思ったのは、自分が書いた文章が読み手に正しく伝わらない場合があることです。正しく伝わらない大きな理由の一つは、一つの文章に多くの意味を詰め込み過ぎるからです。もう一つの理由は、文章が長いからです。このことに気付いてから、私は、「一つの文章に多くの意味を詰め込んではいけない」、「文は短く」を意識して文章を書くことにしました。すると、自分が書く文章がとても幼稚な文章に見えることに気がきました。案の定、先輩から、こんな文章書くなと言われました。

3. 村上春樹になろう

私がミュンヘンでよく使うホテルは、ミュンヘンの中央駅の前にあります。ホテルを出て、大通りを渡ると、ミュンヘン中央駅です。駅構内のサンドイッチやドイツパン屋を抜けると本屋が有り

ます。本屋に入ると右側の棚に文庫本が沢山置いてあります。その文庫本の背表紙をずっと見ていると、馴染みのある名前がありました。Haruki Murakami。「えー、ドイツで村上春樹の本が売ってる。」と驚きました。1冊ではありません。村上春樹の本が並べられている棚の位置（高さ）は床から160cmくらいでした。何か嬉しくなりました。村上春樹の本は色々な国で翻訳されていることを、日本に帰国してから知りました。

数ヶ月後、自宅近くの図書館に行きました。新刊紹介のコーナーに、村上春樹の文章について解説している本がありました。その本には、村上春樹がアメリカの大学で講演した内容に関する記載がありました。大学生（講演会の聴衆）が村上春樹に次のような質問をしたそうです。「あなたの本は日本語なのに、何故、沢山英語に翻訳されているのか」というような質問です。村上春樹の答えは、「文に意味を持たせないように書いてる」だったと思います。このくだりを読んだ時、これだ！と思いました。文は軽くしないとダメなんだと確信しました。

4. 軽い文は悪い文か

軽い文は誰にでも理解できる。書いてある事項を、そのまま、書き手と同じ思いで理解してくれる。外国人が読んでも、理解できる。誰にでも理解できる文を書くことは、上位概念化すると、誰にでも理解できることをすると言ってよいと思います。誰にでも理解してもらえる行為は、評価されてよいと思う。先日、テレビを見ていたら、特許業界以外の人やっている「誰にでも理解できることをする」という話が紹介されていた。そのテレビ番組では、一人の若手クリエイターを紹介していました。ユニクロのロゴやTカードをデザインした人です。ユニクロのロゴは赤地に白文字のアルファベットUNIQLOの二段書き。T

カードは、青地に黄色の T の字。このクリエイターのコメントが面白い。他人からは、こんな簡単なデザインは、俺でも作れるとよく言われるようです。他人から「誰にでも出来る仕事してるね。誰にでも考えつくデザインで、お金もらってるね。」と言われると、普通なら反発すると思います。でも、そのクリエイターは違いました。他人からそう言われることは、褒め言葉だと感じるそうです。何故かというと、見た瞬間に自分の意図が伝わるからだそうです。

5. 日本語と英語の間にある壁の一例

北海道は魚が美味しい。これは日本語として、おかしくない。意味は誰にでも理解できる。でも英語にすると、悩む。北海道を主語にするか、魚を主語にするか。英語に翻訳することを意識しないと、後々、人を悩ませる文を書いたことになる。

明細書の読み手は誰でしょうか？事務所の先輩、クライアント、特許庁審査官、クライアントのライバル会社の人、裁判官、外国人。外国人と言っても、例えば、米国のアトニー、米国特許庁審査官、CAFC 判事、陪審員、米国のライバル会社の人。色々います。この人達に、誤解なく読んで貰える文を書くべきだと、米国のアトニーから教えてもらいました。

「北海道は魚が美味しい。」は日本語としては悪くない文だと思います。でも、私は特許事務所で後輩を指導するときに、この文はダメと言います。

6. 明細書では、1つの部材を複数の言葉で説明してはいけない？

同じ単語ばかり使うな。これは、私がアメリカの大学で essay writing の授業を受けたときに、先生から言われたことです。実は、アメリカでは大学に入ると1年生のときに essay writing (作文) の授業を受けることになっています。あるテーマについて文章を書いて先生に提出したら、先生からお前はバカか、一つの単語しか知らないのかと怒られました。その時は、うーん、同じ言葉を使い続ければ、誤解は生じないのになーと思いました。でも家に帰って先生に言われたことを思い出して、なぜ怒られたか考えました。次の授業からは、一つのことを表現するのに、なるべく異なる表現を使おうと決心しました。何故異なる表現を使う方が良いか。理由は、一つのことを多

面的に表現できるから。作文ではディテールを書くことが要求されます。ディテールを書くためには、一つのことを多面的に表現しなければなりません。提案書に「2つの信号を同時に送信する」と書いてあった場合、「2つの信号を同時に送信する」という表現と「2つの信号を平行に送信する」という表現を明細書に書いてよいと思います。

7. 何を主語にして文を書くべきですか？

「信号が入力されると、制御部は計算を始める。」直訳すると、As a signal is entered, a controller starts calculation. になると思います。でも、すごく不自然な文だと思いませんか。私は A controller starts calculation upon receiving a signal. と訳します。理由は、この文が controller を説明する文だからです。controller の動作を説明するので、主文の主語も controller にして副文の主語も controller にします (その結果、単文になってしまいましたが)。私が知財翻訳検定の試験委員をしていた時、ネイティブの試験委員の人は私の考えに賛同してくれました。

8. 日本語を英語に直訳できるか？

お湯を沸かすという日本語は to boil water か to prepare hot water になると思います。boil と hot water は同時に出てきません (つまり、to boil hot water にはならない)。日本語には結果目的語というものがあるようで、「水を沸かしてお湯を作る」を「お湯」という結果物を使って「お湯を沸かす」と表現してよいことになっています。日本語の文で結果目的語が使用されていることを認識しないで英語に訳そうとすると、誤訳になってしまいます。日本語と英語の間には超えられない壁が在ることも認識しないと、良い明細書は書けないということかも知れません。

9. 最後に

村上春樹の文章は、当初、文壇から評価されませんでした。あんな幼稚な文を書くのは、プロの作家ではないと言われてました。しかし、彼は文のスタイルを変えませんでした。軽い文でよい、という確信があったからだだと思います。

文は軽くする。重たい文は書かない。よく考えて、軽い文にするという点がポイントかなと思います (軽い文は、自然と、短い文になります)。

主語は何にして，副詞はここに書いて，動詞はあれにする。で，1つの文ができる。そして，次の文は，その直前の文と上手につながるようにしつ

つ，また軽い文にする。それで，発明の内容が漏れなく記載できていれば，村上春樹式の明細書になるのかなと思います。